



編集委員 吉岡 桂子

中国という「怪物」 野心への対処は 日本への遺言

彼は中国を「モンスター」と呼ぶようになっていた。その怪物を生んだ「フランケンシュタイン博士」に自らを例えた。

ハンガリーの経済学者、コルナイ・ヤーノシュさんが10月18日に亡くなった。93歳だった。国家が仕切る社会主義体制下で経済が成長する限界を分析した研究は、東西冷戦の終わりと旧ソ連・東欧の体制転換に知的な力を吹き込んだ。ノーベル経済学賞候補にも名前があがった泰斗である。

市場経済化に向けてかじを切った中国にも1980年代以降、大きな影響を与えた。代表作「不足の経済学」など、ほぼすべての著作が中国で翻訳出版されている。85年に趙紫陽首相（当時）から招かれて初めて訪中して以降、改革を支える理論を求める官僚や研究者らを魅了した。

コルナイさんは政治と経済を切り離さず、現実を丸ごととらえた分析が持ち味だ。だが、中国は彼の市場化への助言をつまみ食いするかのよう、政治改革は置き去りにして経済成長を続けていく。

私が最後に会ったのは、19年夏。ドナウ川に臨むブダペストの丘にたつ自宅を訪ねた。壁には北京で買った水墨画があった。

「中国というモンスターが覇権の野心を持って膨張し、世界に脅威を与えている」

その5年前、習近平政権が発足した直後に取材した時よりも言葉がどがっていた。

「中国は共産党一党独裁体制のまま資本主義の要素を取り入れて経済力をつけ、むしろ体制を強固にしてしまった」「権威主義の怪物が、世界の自由を脅かしている」

「コルナイ・ヤーノシュ自伝」（訳・盛田常夫氏）によると、コルナイさんの父は第2次世界大戦中、ナチスドイツ支配下のハンガリーからアウシュビッツの強制収容

所に送られました。兄も労働キャンプで亡くした。自らは終戦直前、労働キャンプから脱走して生き延びる。戦後は共産党機関紙の記者になったが、マルクス主義批判に転じた。研究生活に入ってからには秘密警察による監視と言論統制を生き抜き、民主主義と市場経済への転換を体験する。80年代からは米ハーバード大でも教壇に立った。

だが、物語は民主主義の勝利では終わらない。自由を縮小させながら巨大化する中国に、晩年は失望を隠さなかった。

教え子のひとりで、香港からロンドンへ今春に移り住んだばかりの経済学者、許成鋼・香港大学名誉教授は、亡くなる1カ月前までメールをやりとりした。「政治、経済とも国家の力が強まる中国の行く末を、最後まで案じていました」

日本の対中政策へのコルナイさんの言葉を思い出す。

「注意深く練り上げるべきだ」

「中国の成長を邪魔しようとしてもできないし、しないほうがいい。一方で、野心の膨張に資するような関係は断固ブロックすべきだ」。留学生の受け入れにせよ、貿易や投資にせよ、すべてがノーでもイエスでもない。自らの価値観や利益を損なわぬよう、現実を見極めながら情報を集め、細やかに対応する必要性を指摘した。

対立が深まり、相互の国民感情が悪化する中でも、米国は半年に1度は首脳が電話会談し、年末に3回目を予定する。気候変動問題担当大統領特使のケリー元国務長官はコロナ禍でも2度訪中した。独など欧州は数カ月おきに首脳級が接触している。欧米経済界トップと中国指導層とのオンラインでの面会は頻繁だ。日本は岸田文雄首相が10月に習氏と電話で言葉を交わしたが、政府間の対話は激減している。

モンスターから逃げようとしても、モンスターはそこにいる。対話は融和とは限らない。リスクを管理する手段として重要な意味を持つ。弱腰かどうかは成果が語るものだ。総選挙で続投が決まった岸田政権には、政策を「練り上げる」基盤として対話を使いこなす度量を期待したい。